辛抱と努力のこころを養って国際交流を広げています。

井上朝重さん（神戸国際剣道会会長）

取材・文／大谷成章　撮影／米田定蔵

英会話を楽しむ剣士です。

「さあ、ハワイに着いたぞ。私が入国管理官だ。Aloha! What's your name?」

先ほどまで竹刀を振っていた子どもたちが英会話の練習を始めています。名前や年齢、滞在予定などを聞かれてきちんと答えられると、「OK,enjoy good days on Waikiki beach!」と手のひらにスタンプを押すまねをしてもらえます。

入国管理官役をやっているのは井上朝重さん（54歳）。飛行機のスチュワードになったり、お店の店員になったりもします。神戸国際剣道会（注1）の会長で六段の剣士というきびしい顔付きからは一転し、なごやかで表情豊かに英会話の舞台を演出しています。

ホームページ（注2）では、ここで剣道を習い、英会話を教えた外国の人たちの感想やメッセージを読むことができます。

「カンカン」と小気味よい撃剣の音が響き渡り、汗みどろのけいこが続けられている（神戸市長田区・長田南小学校）。

大震災の助け合いから「国際」の名が生まれました。

神戸国際剣道会が生まれたのは1995年、阪神・淡路大震災が起こった年の秋です。それまで井上さんたちは、神戸市長田区の兵庫県立文化体育館で子どもたちを指導していましたが、建物が壊れて仲間は散り散りになりました。

10月になって長田南小学校の体育館が使えるようになり、再びみんなが集まった機会に神戸国際剣道会と名前を変えて再出発しました。

震災の救助・救援に国の内外、国籍を問わず、世界中から手が差し伸べられ、人間のやさしさ、強さを実感し、お互いに助け合うことの大切さを身にしみて知ったからです。

いま会員は小学生から大人まで

注1　**神戸国際剣道会**　火・土曜日午後6時から神戸市長田区神楽町1、長田南小学校体育館でけいこ。6歳以上から参加できる。現在半数近くが女性。リーダーの数人は英語で指導する。
問い合わせ先☎078・241・1721

注2　**ホームページ**　http://www.Inoue-jp.com
メール紹介にはアメリカ、イギリス、オーストラリアなどから剣道についての感想や希望が書かれている。英語だけでなく、ひらがなやローマ字でつづった日本語の手紙もある。

井上朝重（いのうえ・ともしげ）さん
1946年神戸生まれ。建設会社の事務員から独立、商業施設の設計施工を始める。30歳から剣道を習い、現在は錬士6段。兵庫県剣道連盟評議員。神戸市須磨区在住。

40人。週2回のけいこのほかに、交流行事を広げています。昨年は神戸市中央区の聖ミカエル国際学校のバザーに行って剣道のデモンストレーションをし、片言の英語でおしゃべりを楽しみました。

「間違うことを気にしない。気持ちを伝える努力が大事なんだよ」と井上さんは子どもたちを励まして

日本人であることに誇りを持っていますか？そこから国際人が始まります。

井上さんが英語を本格的に身につけようとしたのは「娘の笑顔がきっかけだったんです」と言います。

20年ほど前、中学1年の娘さんとロサンゼルスへ行き、ディズニーランドで「ポップコーンを買ってきて」と50セントを渡しました。おずおずと売り場に近づいた娘さんは、ポップコーンが振りこぼれるのもかまわず、踊るように戻ってきました。

「私の英語が通じた」と大喜びです。

「外国の人と言葉が通じるのはこんなにもうれしいことか」と井上さんは英語を改めて勉強しました。

国際交流に関心をもったのは本業の建築の仕事を通じて、外国船の乗組員支援組織「ミッション・ツー・シーフェラー」にかかわったことにあります。イギリスに本部を置き、世界160カ所に拠点をもつ組織で、日本では横浜、苫小牧、神戸にあります。井上さんは神戸支部の建物の移転と改装に携わったことから運営委員の一人になりました。

そこで「私は日本人だ。でも本当に日本を知っている日本人だろうか」と反省しました。スポーツとしてやっていた剣道を、日本文化として見つめ直すようになりました。

外国の船員を道場見学に案内すると「剣道の礼儀作法と集中力はすばらしい文化だ」と感心されることから、逆に教えられた、ということもあります。

国際化社会というのは、外国語がしゃべれたり、外国人のように振る舞ったりするだけではない。日本人であることに誇りを持って、日本人であることを主張できる日本人こそが国際人になれるのだ、と考えるようになったのです。

「先生の教えは厳しいけど、がんばる心と体ができます」とジョン・シルズさん（30歳）。ボストンで剣道を習い始め、現在3段。「集中力と注意力がついて社会でも役立っています」

辛抱と努力から新しい「私」が生まれます。

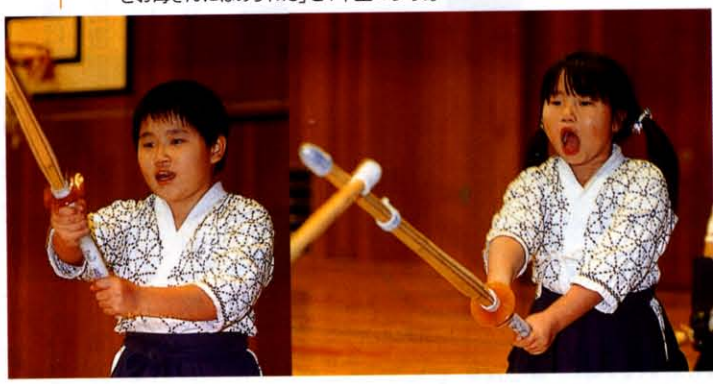
剣道を学んで得るものは「辛抱と努力だ」と井上さんは思っています。たたきあいが上達することが目的ではありません。

「スポーツによって他人と競うのはいいことだが、まず自分の中の自分と競うことだ」と子どもたちに教えています。「お金や腕力で他人と競っても、そこには本当の勝利の喜びはない。辛抱して努力し、自分に勝ったとき新しい自分が誕生する。それが剣道の楽しさだよ」と説いています。「努力すれば後のことはついてくるんだ」と。

大震災で井上さんの本業は振るわなくなりました。仕事の依頼はたくさんあったのですが「この時期によそからやってきている職人さんを使うと日当のほかに宿泊費や交通費などがコストに入って高い工事費になる。お客さんに迷惑をかけたくない」と、もっぱら家屋の損害調査や「解体しないで仮営業でがんばろう」とブルーシートを張る応急修理ばかりをしていました。

ところが、剣道を習いにきていた6歳のアメリカの少女のお父さんから「英語ができて工事に詳しい人を探しているんだ。テストを受けてみないか」と声がかかりました。大阪に建設するユニバーサル・スタジオ・ジャパンの技術コーディネーターの仕事です。

「努力すればついてくるとはこのことでしょうね」と井上さんはオープンを前にして忙しい日々を迎えています。

みなとまち神戸の外国船船員とのおつきあい、大震災で気がついた世界中の人たちの温かい心。それが剣道という日本文化の一つに結びついて、力強い国際交流を発信しています。

少年組初心者も力いっぱい。「きちんとあいさつし正座もできるようになったね、とお母さんにほめられた」と4年生の少女。